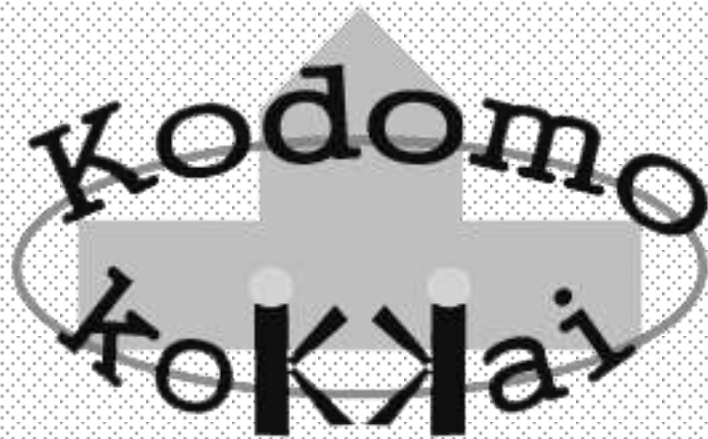
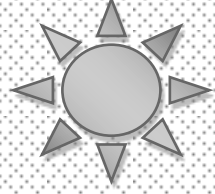
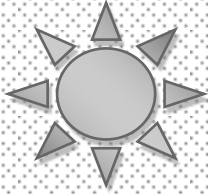


第10回子ども国会 宣言書



子どもへこれからの社会と
向き合うきっかけを提供する

平成25年8月16日
子ども議員一同

目次

- p. 2 **本当にあるべき『先生』の姿とは**
- p. 8 **これからのエネルギー問題**
 ～原発事故をふまえて～
- p. 13 **改めて考える選挙制度とこれから**
 ～今、僕らに出来ること～
- p. 17 **わたしたちとメディア**
- p. 21 **仕事と育児**
 ～子育てはだれがする？～
- p. 24 **これからの震災とどう向き合うか**

本当にあるべき『先生』の姿とは

参加者名: 高橋和樹 広瀬暖菜 鈴木秀康 中村桃子 小澤寿子

<現状>(自分の学校と先生の良いところ・悪いところ)

授業

- ◎面白い授業
- ×単調な授業

生活指導

- ◎個別に対応してくれる
- ×校則が厳しい

人間性

- ◎接しやすい性格
- ×生徒と向き合っていない

部活動

- ◎先生が個性的
- ×部活に関心がない

◆先生の仕事には何がある？

- ・授業、生活指導
- ・保護者会 (PTA)
- ・学校説明会
- ・三者面談
- ・研修、実習
- ・採点、成績処理
- ・進路指導
- ・パトロール

⇒ 先生は 平均約 17 時間/週(男性)
平均約 14~15 時間/週(女性) 残業している。

⇒ とても忙しい!!!

本当にあるべき『先生』の姿とは

<原因><何のために学校があるのか>

学級経営(担任等)

- ・個性を磨く
- ・居場所をつくる(第二の場所)
- ・自己肯定感をもって、客観性を養う

授業(担任)

- ・基礎教育→将来の選択肢を広げる
- ・社会の仕組みを学ぶ

集団生活(生活指導等)

- ・人間関係をつくる
- ・コミュニケーション力を養う
- ・尊重し合う

社会生活(生活指導)

- ・社会に出るための準備
- ・きちんとした大人になる

学校行事(すべて)

- ・色々な体験をする
- ・自立する

部活動(顧問)

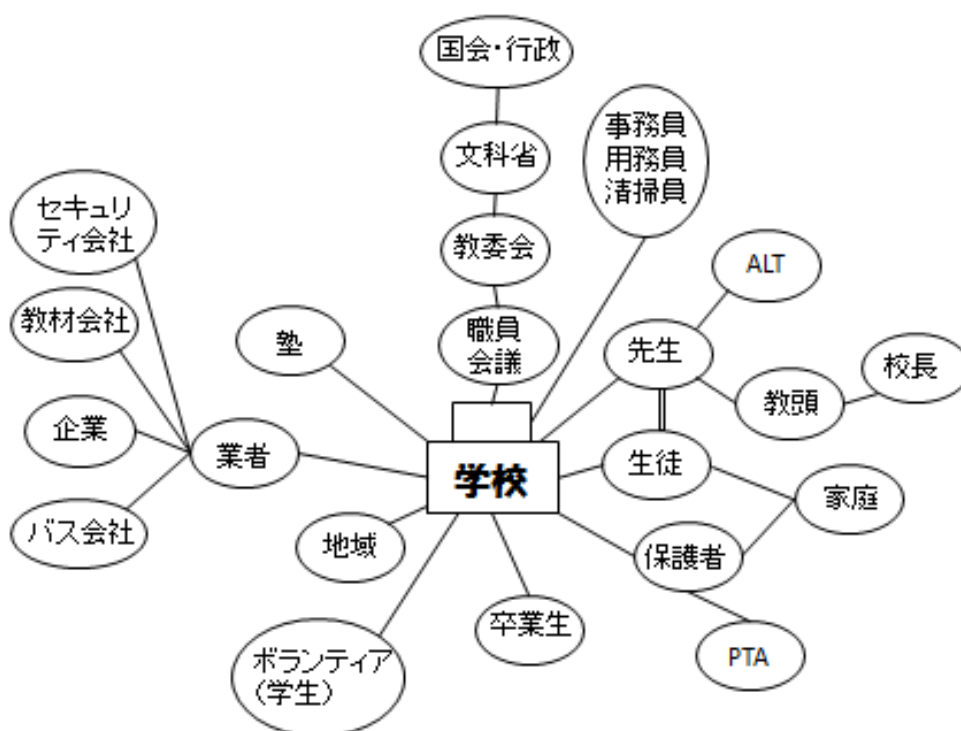
- ・色々な経験をする
- ・上下関係を学ぶ

⇒ これらをすべて担当するのが学校ならば、
先生が忙しくてすべてのものができなかつたり、中途半端になつたりする。

⇒ 学校を取り巻く機関(家庭・地域・文科省 etc...)に仕事を分担する。

～学校を取り巻く機関に仕事を分担する～

◆学校を取り巻く機関を挙げる



◆どのように分担するか

	地域	卒業生	ボランティア (学生)	企業・NPO	家庭
仕事	・地域パトロール	・部活動	・学校行事	・進路指導	・生活指導 ・マナー ・生活習慣
	・授業(地域の歴史)	・学校行事		・カウンセリング	
	・学童保育	・生徒会		・総合の授業 ・キャリア教育	

⇒ このように、周りに仕事を分担すると、先生に余裕ができる。

本当にあるべき『先生』の姿とは

<理想>～先生が本当にすべきこと～

- ・授業を工夫する(ディスカッション等)、授業の準備をきちんと行なう。
- ・生徒を思う。
- 生徒のニーズを知る。
- ・生徒ともっと交流する。
- (例)・クラス全体で交換日記をする。
 - ・先生独自の時間や生徒主体の時間をつくる。
 - ・個人面談を行なう。
- ・LHR(学活)の充実
- 卒業生等の講演会を開催する。
- ・先生も積極的に部活動に参加する。

⇒ **Q. 本当にあるべき「先生」の姿とは…？**

⇒ **A. 生徒とともに歩む先生！**

<解決に向けて>

子ども議員の提言

地域の方へ

- ・地域の安全確認(パトロール)にご協力ください。
- ・校外学習(地域・歴史等)にご協力ください。
- ・学童保育等、家で1人で過ごす子どもが大人と関われる機会をつくってください。

卒業生の方へ

- ・部活動への指導、補助にご協力ください。
- ・学校行事に参加してください。
- ・学活などの授業に参加して、在校生とのコミュニケーションを図ってください。
- ・生徒会やその他委員会の運営サポートにご協力ください。

学生ボランティアの方へ

- ・学校行事へ参加してください。

企業・NPOの方へ

- ・学生の進路指導の相談に乗ってください。
- ・カウンセリングにご協力してください（心理関係の企業・NPOの方）。
- ・学活などの授業に参加して、在校生とのコミュニケーションを図ってください。

保護者（家庭）の方へ

- ・マナーや生活習慣などの生活指導をしてください（家庭の事情により生活指導のできない家庭には、地域・企業・国の方々がサポートしてください）。

授業学研究所の方へ

- ・生徒がより興味を持つような授業を先生方に提供してください（特に、私たちが挙げた授業方法を提供してください）。

私たちができること

- ・生徒会などがお悩み相談室を開く。
 - ・学活の時間に民主主義の体験をする。
 - ・家庭内でお手伝いをすることで、自立への基礎を養う。
- ⇒社会生活への一歩を踏み出す！

感想

僕は、この分科会に参加して、先生に対しての見方を変えることができました。先生は、自分たちの知らないところで色々な仕事をやっていて、そのためにとても苦労したり、大変なんだな、ということがわかりました。たった2日間だったけれど、濃密な討論ができました。ありがとうございました。

中1 高橋 和樹

私は、この分科会で議論して、身近な存在である「先生」が必至で働いていることを改めて感じ、「先生」に対する感謝の気持ちが込み上げてきました。しかし、その忙しさによって、授業がつまらなくなったりして、生徒と先生の間隔が広がったりもします。ですが、この議論で解決方法を見つけられたため、まずは私の学校から先生と生徒のあり方を変えていって、それが他の学校にも伝わればいいな、と思いました。ありがとうございました。

中2 広瀬 暖菜

これからのエネルギー問題

～原発事故をふまえて～

参加者名: 上村慈蓮 大間直美 西澤亮作 今井宥里 福島広希 河合遼

目指したい未来

私たちが今回提案する目指したい未来はエネルギー消費量とCO₂排出量が少なく省エネが実現されている社会です。

このことが実現された未来は以下のようになります。

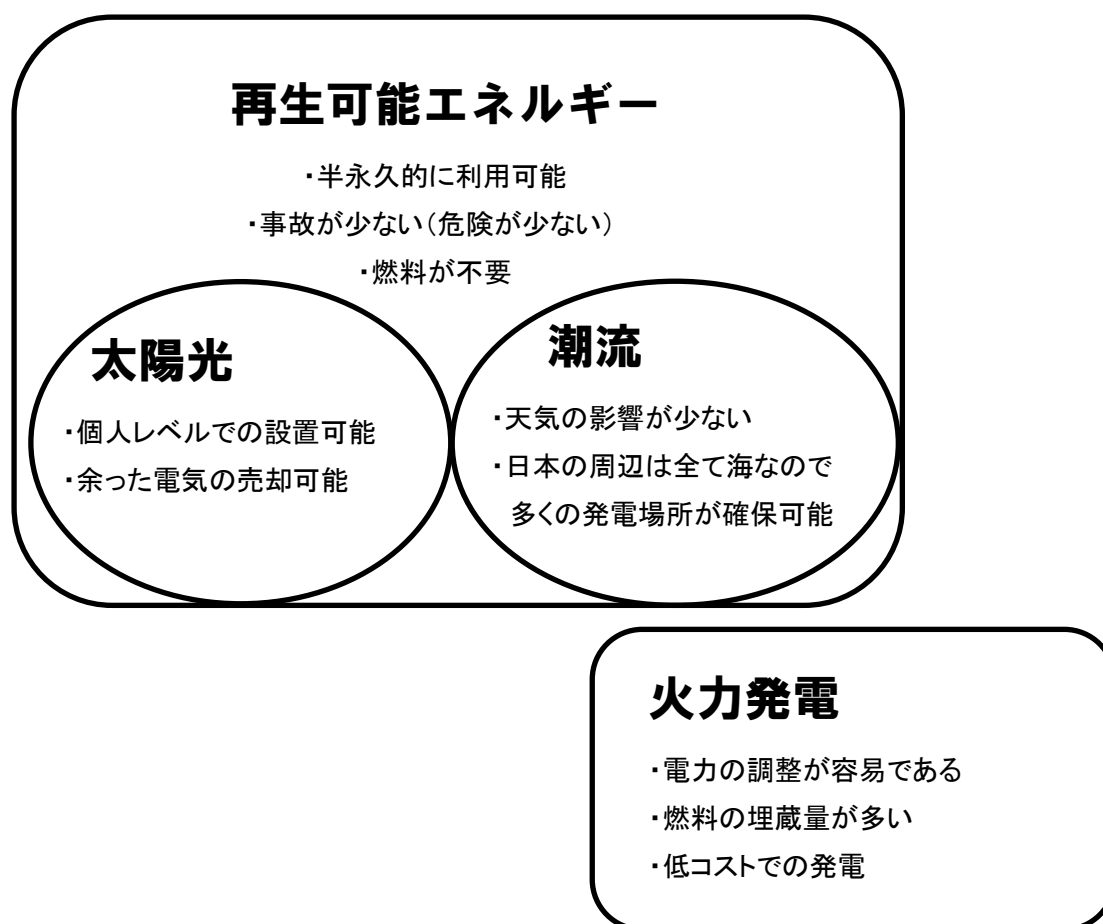
土地を適材適所で有効利用することによりエネルギー効率のよい都市が実現されています。そして技術革新による発電方法の開発、省エネ製品の普及など多方面からエネルギー効率がよくなっています。また技術革新によって得た技術で日本が世界をリードし、世界へ技術を輸出していきます。

このような未来を創っていくためのエネルギー問題を解決する方法を私たちは考えました。

これからの発電方法

原発、火力、再生可能エネルギーを、発電方法をいろいろ考えた中から、メインにして考えました。そこで、これからの電力をなにに頼っていくかを考えた際に、原発は事故の今後の影響なども考え、これからも使い続けるという選択よりも数を徐々に減らしていく方が良いと考えました。私たちは、原発をこれからすぐになくすことはできないけれど、できるだけ早く数を減らしていき、そこで足りなくなった電力を開発によって発展した再生可能エネルギーや火力で補っていく方法が良いと考えました。

<火力及び再生可能エネルギーのメリット>



以上のようなメリットを活かして、再生可能エネルギー、火力発電で補助しつつ少しずつ原子力発電からの脱却を目指します。しかし、これら2つの方法にはデメリットがあります。

火力発電に関しては、すでに多く指摘されているようにCO₂を排出してしまいます。また、燃料輸入等に際し、多大なコストがかかるという点、その燃料の産出国が限られてしまっている点などが問題点として挙げられます。

再生可能エネルギーに関しては、施設を設置できる場所が限定されてしまう、発電方法によっては平均1kwhあたり30円のコストがかかる、また、特に太陽光発電に関しては発電の時間が限られてしまい、それによって発電量が安定しない、などという点が挙げられます。

政策提言

1 全体に共通する課題

(1) 省エネルギー

エネルギーを使っている私たちが、どれほどの無駄遣いをしているかわかっていないのが問題点であると考え、私たちは2つの解決策を提言します。

- ①消費電力の少ない物の開発、使用を進めること。これには技術の発展に力を入れることも必要になります。
- ②需要側の使用量管理をすること。具体例としてスマートハウスの電力消費が確認できるシステムを利用するなどです。これにより「電気を使う習慣」に気を遣うようになり、使用量を抑えられるなどの効果が考えられます。

(2) 技術者の問題

次に、技術者の不足、特に多くの発電方法にかかわり、広い分野の知識をもった人材の不足が問題だと考えました。

解決のためには、技術者育成学校を開校することや、現在ある技術を他分野にわたって共有することで、需要がある人材をより多く供給することが必要です。

(3) コスト対策

原発の削減、また再生可能エネルギーの技術発展に関しても多大な資金が必要となります。さらにそれらに関係する人々の人権費もかかってしまいます。それにより、電気代が増加、電力利用者である我々国民の負担が増えてしまうのです。それらを改善し、費用を調達する為には、

- ①日本の現在持っている進んだ発電技術の輸出
- ②電気税という形で、電気使用量に応じた税金を回収するなどということが必要であると考えました。

(4) 国民の関心を高める為に

原発事故後、国民のエネルギー問題への関心は以前よりも高まったように感じられますが、原発以外の発電方法等含めたエネルギー問題全体への関心は未だ低いと私たちは考えます。それが理解不足をまねき、新しい発電所を建設しようにも立ち退き問題等が生じてしまうのです。

この点に対してエネルギーに関するイベントを増やすことによって関心を高めること、さらに、学校の授業などで取り扱うことで教育面でも理解の強化をはかることを、今後、より推進していくことが重要だと考えました。立ち退き問題に関しては、補助金や手当の充実化により解決を目指します。

2 原子力発電所対策

原子力発電所を廃炉するにあたって「核のゴミ」は出てしまいます。それに対する処理の方法として廃炉時に利用可能なロボットの開発が必要であると私たちは考えました。そして、このような廃炉方法を日本で確立し、それを海外に輸出することによって利益を得ることが出来、又日本が世界のエネルギー問題に働きかけることが出来ると考えます。

3 火力発電所対策

火力発電の問題点として挙げられるのは、①石油危機に代表されるように、燃料の確保が不安定であること、②再生可能エネルギーなどと比べると発電効率は良いが、火力発電そのもののみで発電効率を考えると、発生した水蒸気の約 60%が無駄になっていることなどから、効率が良いとはいえないことです。これらの解決のためには、燃料となる資源ごとに複数の供給元を確保することや、より効率のよい発電方法を開発し普及させることが必要です。

4 再生可能エネルギー対策

再生可能エネルギーには電力供給を安定させることが難しいという問題点があります。このことに関しては発電量を調整することができる火力発電で補い、又再生可能エネルギーで発電する場所を特定地域に限らず分散させるという対応策をとることが出来ると考えます。

上記とは別の課題として、そもそも再生可能エネルギーの発電機数が現段階で少ないという問題点が挙げられますが、この点については、技術開発に力をいれ、より効率を向上させることで解決を図ることを提言します。

感想

ぼくはこの二日間で人と話すことの大切さと、知らなかったエネルギーの知識を得ることができました。これからも子ども国会に参加していきたいです。

小6 上村 慈蓮

今までいくつかのイベントには参加させていただきましたが、泊まりも含めたものは今回が初めてです。このような長い時間に渡って議論を交わしたことは本当に有意義な経験になりました。楽しかったです。ありがとうございました。

高3 西澤 亮作

二日間という長い時間をかけて一つの議題について議論するのははじめてで、選んだテーマが専門的で少し難しかったけど、色々な話をきけて、自分の中でも知識になってすごく面白かったです。ありがとうございました！

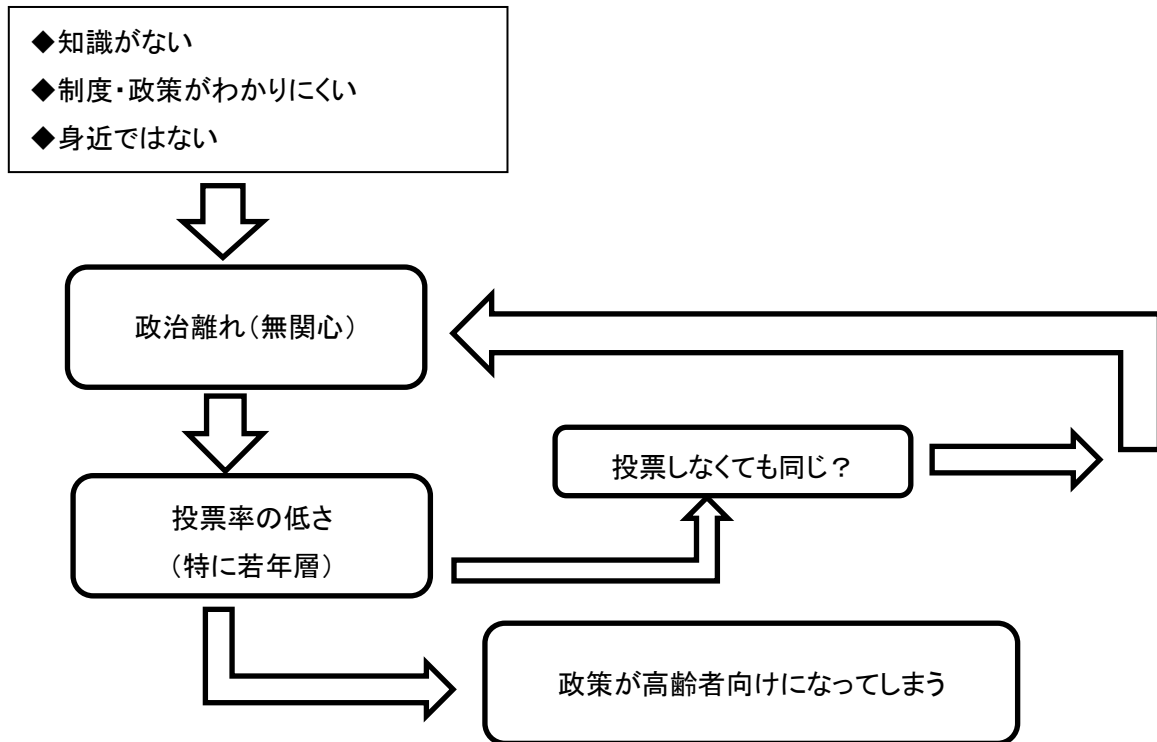
高2 大間 直美

改めて考える選挙制度

～今、僕らに出来ること～

参加者名: 板垣春人 野村亮輔 二見友也 水野翔太 栗田雄輝 猪俣翔平

現状

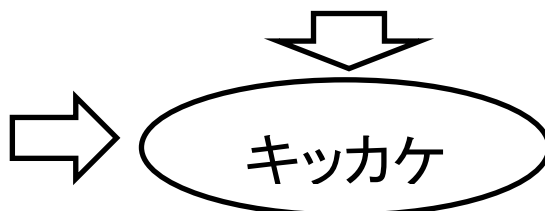


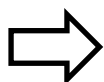
解決策

- ☆知識がない
→学校での政治教育
 - 生徒会選挙
 - 模擬選挙
 - 政治や社会問題について討論する場を設ける
- ☆身近でない
→若者文化との融合
『政治×○○』
 - アニメ
 - フラッシュモブ
 - ゲーム(人生ゲーム、育成ゲーム、ソーシャルゲーム、アプリ etc)

☆ + α

- 音楽やダンス
- 会いにいける会いに来る政治家





インターネットを使って政治をより身近なものへ

〈例〉

投票なうキャンペーン

Google・Yahoo!などでの広告

YouTube での CM 放映

政党、政治家マッチングサイトの活用

NHK による政見放送のネット配信

Twitter 等の SNS による政治家とのコミュニケーション

わかりやすいキャッチコピー作り

→実際に投票に行きたい！

→でも、当日行けない。

- 期日前投票 ◆時間が短く、仕事帰りの社会人などが利用しにくい。
- ◆投票所によって時間がバラバラ

→ ■ネット投票 ◆セキュリティに問題があり、投票の重みが薄れる。

→実現が難しい。

→ 期日前投票の時間を統一し、更に22時位までに延長する。

☆選挙に死票はつきものである。

→その部分を補えるために「署名」「デモ」「パブリックコメント」がある。

→しかし、あまり認知されていない

→又、やることに対して抵抗を感じる

} 自治体の環境づくり

理想

- 有権者(特に若者)が主体的に政治参加できるようにする。

改めて考える選挙制度
～今、僕らに出来ること～

〈総務省の皆さまへ〉

- YouTube等の動画サイトにてCMの放映をし、選挙をより人々の目に触れるようにして下さい。
- 当日投票に行けない人のためにある期日前投票ですが、投票所によって時間がバラバラであったり、時間が短いため、仕事帰りの社会人が利用しにくい。方法の1つとして24時間投票可能なネット投票があるが、セキュリティ面の問題や投票の重み(実感)が薄れることもあり、現実的に実現は難しい。そこで、期日前投票所の時間を統一し、更に22時まで延長をご検討下さい。

〈文部科学省の皆さまへ〉

- 現代の若者の現状として、選挙など政治について「生きた知識」を持っていない。なので、学校の生徒会選挙、模擬選挙、政治や社会問題について討論などを利用して、「生きた知識」の育みを促進してください。

〈東京都選挙管理委員会の皆さまへ〉

- SNSユーザー、特に若者を対象とし、SNS上での選挙への前向きな雰囲気作りをするため、投票所で写真を撮り、任意で「選挙なう」と投稿させて下さい。(※投票なうキャンペーン)その際、投票所の入り口に写真を撮るための人を1名を人員配置してください。

〈明るい選挙推進協会の皆さまへ〉

- 政治や選挙に興味・関心のない若者を対象に、若者文化との融合をしたコンテンツを配信してください。例えば、アニメやフラッシュモブ、ソーシャルゲームアプリなどや人生ゲーム、育成ゲームなどと政治や選挙を織り混ぜた新しいジャンルを開拓して下さい。
- GoogleやYahoo!などで広告を掲載し、NHKによる政見放送のインターネット配信、SNSによる政治家とのコミュニケーションなど、インターネットを用いて、政治を国民(特に若者)にとって身近なものにしてください。

感想

僕は以前から、若者の政治への無関心やこの国の選挙制度について興味があったので、今の日本の選挙が抱える問題などについて話し合いたいと思い、この分科会を選びました。初めてだったので少し不安でしたが、討論の場では、自分とは全く違う立場からの発言や奇想天外なアイデアなど、いろいろな意見を聴くことができ、とても楽しかったです。今回話し合ったことを活かして、これから政治やこうした活動に積極的に参加してみたいと思いました。

高1 板垣 春人

今回は「選挙」についての分科会を選びました。この間、参院選があったばかりの話で、色々と話題が出ているタイムリーな内容だと思いました。討論では、色んなところから来た方々とたくさん話し合えたので良かったと思います。それぞれの人達の意見があり、またそれに共感出来ることもありました。色んな人の意見を聞いたとても貴重な機会に参加できて良かったです。2日間とても楽しかったです。

中2 野村 亮輔

最近、2012年12月の衆議院選挙、そして2013年7月の参議院選挙などの問題が取り沙汰されることが多い。投票率の低下、若者の政治離れ、一票の格差など問題は山積みだ。そんな中、今回この分科会を通じて、同年代の仲間たちと選挙のこと、ひいては政治のことについて語り明かすことができ、とても成長できたと思う。今後も自分で思考することを忘れず、時には今回の仲間たちと語る機会を持ちたいと感じた。

高3 二見 友也

わたしたちとメディア

参加者名: 木村菜々子 川田りさ 黒金友太郎 齋藤由祐也 加藤千華 下平千穂
渡邊あすか 鎌田将晴

問題点

(SNS)

- ・SNS 中毒
- ・SNS 疲れ
- ・信憑性がない
- ・誹謗中傷
- ・情報の取捨選択が出来ていない

(マスメディア)

- ・製作者から視聴者・読者への一方向のメディア
- ・一部のバラエティ番組の質が低い
- ・一部の視聴者が受動的(主にテレビ)
- ・テレビ局が内容をわかりやすく噛み砕いた中高生向けの番組を作っていない

コミュニケーションを円滑にするメディアを作る必要がある

自分たちですること

(SNS)

- ・発信する前に文章を確認する
- ・程よいSNSとの距離感を保つため、制限時間を設けたり、やるべき事の優先順位を考えたりするなど「自分のルール」を決める
- ・通知音がならないように電源をオフにし、1日全く使わない日を決める
- ・失敗例などの知識を学ぶ
- ・発信者としての自覚を持つ

(マスメディア)

- ・正確な情報がわからない
→異なる出版社、異なる局を比較してみる、考えを深めるために身近にいる友人などと話し合う
- ・情報の内容に関する民度の低さ
→お笑い番組などにおけるヤラセ、過激な表現の存在、それが当然と考えられる現状を改善するため、番組を視聴しないという自らの意思表示を行うべき
- ・様々な視点から情報を手に入れる
→比較
新聞を1つのトピックでいいから読んでみる。ex)電子書籍などを使う

⇒これらをすることで自分で正確な情報を取捨選択することが出来る

大人たちにしてほしいこと

(SNS)

- ・学校におけるインターネットやコミュニケーションに関する授業の義務化
→情報化社会において適切な教育を行うことにより正しい知識を持ち利用できる
- ・文章の書き方について扱う国語の授業の導入
→考えて正しい文章を書くことが可能になり SNS 上でのトラブル防止につながる
- ・有名人を起用した広告・講演などによる呼びかけ
→影響力のある人材を起用することにより確実に認識を浸透させられる

(マスメディア)

- ・より面白く、客観的な視点から番組や雑誌などを作るために

↓

見ている側の意見を取り入れる必要がある

↓

読者・視聴者へのアンケートを実施する

- ・情報の質を良くするための BPO という監査機関がある

↓

あまりよく知られていない

↓

TV・雑誌・インターネット・CM で伝える

- ・中高生が社会の問題を理解できていない

↓

メディアによるわかりやすい説明が必要

↓

中高生向けに噛み砕いた説明の番組を夜遅すぎない時間に放送する

感想

参加者とサポーターという両方の立場で討論出来たと思います。ファシリテーター研修で学んだことをみんなに教えつつ、自分も実行で出来たので良かったです。

高1 加藤 千華

我々にとって非常に身近であるメディアが抱える課題について、自分たちにもできることが存在するということを学べたのは、非常に大きな成果であった。また、昨年の経験を活かすことのできた点もよかったと思う。

高3 斎藤 由祐也

今回、2回目の参加です。私がこの分科会を選んだのは、メディアは自分に身近な話題で、もっと深く考えてみたいと思ったからです。この討論を通して、たくさんのことを学びました。楽しかったです。ありがとうございました！

中2 木村 菜々子

メディアで報道されていることが、いろいろな事情で事実から書き加えられていることに違和感を持っていた僕だったが、今回の場を通して自分1人の小さな力でも、そういった事実を変えてゆけることを知った。来て良かったと思う。

中2 黒金 友太郎

中高生で討論するイベントには初めて参加したので、色々な人が色々な意見を持っていることに驚きました。この討論でたくさんのことを学べて良かったです。

中3 川田 りさ

仕事と育児 ～子育てはだれがする？～

参加者：小倉眞生 遠藤光里 石田庸 橋本樹 雨宮祐樹 田鍋すみれ
中嶋千夏 中川崇 石丸葵

問題点

私たちはまず、特に仕事や子どもについて、30歳になった自分の理想を考えた。そして、それを実現するために課題となりそうなことを考えるうち、問題として以下の3つが挙げた。

- ①家庭像への偏見
- ②母親へのプレッシャーが大きい
- ③仕事と育児の両立が身近でない

解決策

1. 偏見について

特殊な環境におかれている家庭を見てどう思うか。特殊な環境とは、例えばシングルマザーや若年層での出産である。本来、出産は祝われるべきことなのに、このような状況においては、出産が批判的に捉えられることがある。これらの偏見を受けた親は育児に関する悩みを他人に相談できず、ストレスを溜め込み、そこから虐待や育児放棄に陥るケースもある。また、大学を出て就職し、仕事で活躍していくという人生設計の中で、育児の優先順位が低いことも問題だ。

偏見をなくすために、まず、メディアを通して多種多様な家庭像を人々が受け入れやすくすることを提案する。具体的には、若くして出産を経験した人やシングルマザー・ファザーについて取り上げたドキュメンタリー番組の制作、CMの放映などを行うべきだ。

また、そのような親が悩みを相談しストレスを発散できる場をつくることを提案する。例えば、親のための「駆け込み寺」を設置し、様々な環境にあって悩みを持つ親のストレスを削減する場とする。さらに、高校の授業や教科書でこのシステムについて説明を加えることで、10代も「駆け込み寺」の存在を知ることができると思う。

また、若いうちでの出産を行うことができるように、22歳以下での出産には国が補助金を出すことを提案する。出産費用に50万円以上かかり、それ以外にも多くの費用がかかるので、100万円ほどの補助金の支給を検討する。

さらに、シングルマザーや事実婚への法令上の差別を禁止すべきである。

2. 母親へのプレッシャーについて

世間の目があることや女性特有の母性から生じる、子どもを立派に育てなければという義務感、使命感、責任感によって、母親は、育児に対しゴールの見えない目標との戦いを強いられていると感じてしまう。しかし、世間から評価を受けることを根本的になくすことは不可能である。だからここでは、母親にかかっているそのようなプレッシャーをできる限り軽減することを重点目標とした。

一つ目に、ママカフェというものを考えた。ママカフェとは、甘いものを食べながら、母親同士が育児上の問題や悩みを気軽におしゃべりできる場である。利用しやすいよう、職場内への設置を検討する。悩みを同じ立場の人に聞いてもらうことで、プレッシャーを軽減するはたらきがあると考え。

二つ目は、企業での男性向け育児講習会の実施である。父親にも育児に積極的に関わってもらうことで、母親のプレッシャーを減らすことができる。この講習会の目的は、単に男性の育児に関する知識を高めるだけでなく、育児への関心や意欲をかきたてることも含んでいる。

この二つの対策を、まずは実際に厚生労働省に取り入れていただくか、もしくは、この活動を採用してくれる企業を募集していただきたい。採用した企業には、社内のモチベーションが上がり業績アップにつながる、企業イメージが上がるなどのメリットがある。さらにその成功例を厚生労働省が宣伝することで、他の企業もこの活動を取り入れるようになると考える。

3. 仕事と育児の両立について

仕事と育児を両立させるのは難しいとよく言われ、私たちも問題意識はあった。しかし、このことについて話し合いをあまり深く掘り下げることができなかった。その原因について考えてみると、私たちは、育休などの福祉制度や、子育てをしながら仕事をする人々の苦労を身近に感じる機会が少ないことがあげられる。私たちが仕事と育児の関係について身近に感じるようになる一つの方法に、実際に他の家の子どもを預らせてもらうということがあがあるが、それを広めるのは責任能力の問題などで難しい。

そこで、私たちが仕事と育児の両立で苦労している人から話を聞くことで、今までイメージでしか捉えられなかったものを、少し身近に感じるようになることを考えた。例えば、中学校や高校の授業の一環として、話を聞く機会を設けることが挙げられる。

こうした取り組みが現実化することを要望したい。

仕事と育児
～子育てはだれがする？～

感想

今回の子ども国会を通して育児の難しさや大切さを学ぶことが出来ました。
またみんなの考えていることを聞き参考にできました。

高1 雨宮 裕樹

自分と意見の違う人と話すことで視野が広がりました。
また、世代や性別で子育てに対しての意見が違うことがわかりました。

高1 橋本 樹

まだ遠いように見えて実は近い、そして重要な問題について話せて良かったです。
ここで話し合ったことをこれからに活かしていきたいです。

高3 田鍋 すみれ

具体的に考えていなかった自分の将来を具体的に考える良い機会となりました。
今まで、女性の社会進出に興味はあったのですが、今回広い視野を持つことができた。

高3 小倉 眞生

自分の意見を話すことにも他人の意見を取り入れることにも難しさを感じた。
しかし、そんな議論がとても面白く、とても興味深かった。

高1 石田 庸

将来を担っている私たちが主体となって現状の育児問題について取り組むべきであると改めて考えさせられた。今回このように2日間議論を通して大きく成長できたことをうれしく思う。

高3 遠藤 光里

これからの震災とどう向き合うか

参加者: 筒井音羽 野村祐輔 齋田悠平 若井悠貴 西村一光

齋藤翼 森田聡 大澤麻美

この分科会では、これからの震災とどう向き合うかについて話し合い、以下の4つのテーマを上げました。

- ① 身近にひそむ脅威とは
- ② 地域とのつながり
- ③ 防災教育
- ④ 行政に起因する問題

次から、それぞれのテーマについて、現状と理想像、改善策について話し合った結果をまとめました。

①身近にひそむ脅威とは…

日常生活において、身近に存在するもののうち、地震によって危険物になりうるもののことを指す。
(例)ブロック塀、看板、本棚、窓ガラス、壁、照明などの倒壊、転落、もしくはそれらの破片による死傷。

これらの危険物からみを守る方法として以下のことが挙げられる。

1. 教育

私たちの多くは、身近にひそむ脅威を危険なものとして認識していない。

これらの脅威に対する身近な対策は…

(例)つかえ棒、耐震マット、テープによる固定などがあげられる。

このような対策の周知活動を教育現場で行っていくべきだと考える。

また、それらの対策に真剣に取り組むために危機意識の教育を行うべきである。

(例)実際の体験談、写真、ビデオなどの活用、現地訪問。

2. 法整備

しかし、実際の教育現場において避難訓練に真面目に取り組む生徒が少ない現状から、教育には限界があると考えられる。

そこで、法の制定によりそれらの対策を強制することにより、確実な成果が得られるのではないかと考える。

前例として、2006年の住宅用火災報知器の設置義務化がある。このような前例で培われたノウハウを生かすことは可能なはずである。

これからの震災とどう向き合うか

3. 技術革新、代替品の使用

別のアプローチとして、身近にひそむ脅威の危険度を技術や代替品の使用により、低下させることが出来ると考える。

(例)ブロック塀→鉄製の柵(代替品使用)

看板→埋め込み式看板、小型化、デジタル看板(技術革新)

以上、三点を対策として提案する。

②地域とつながり

現状

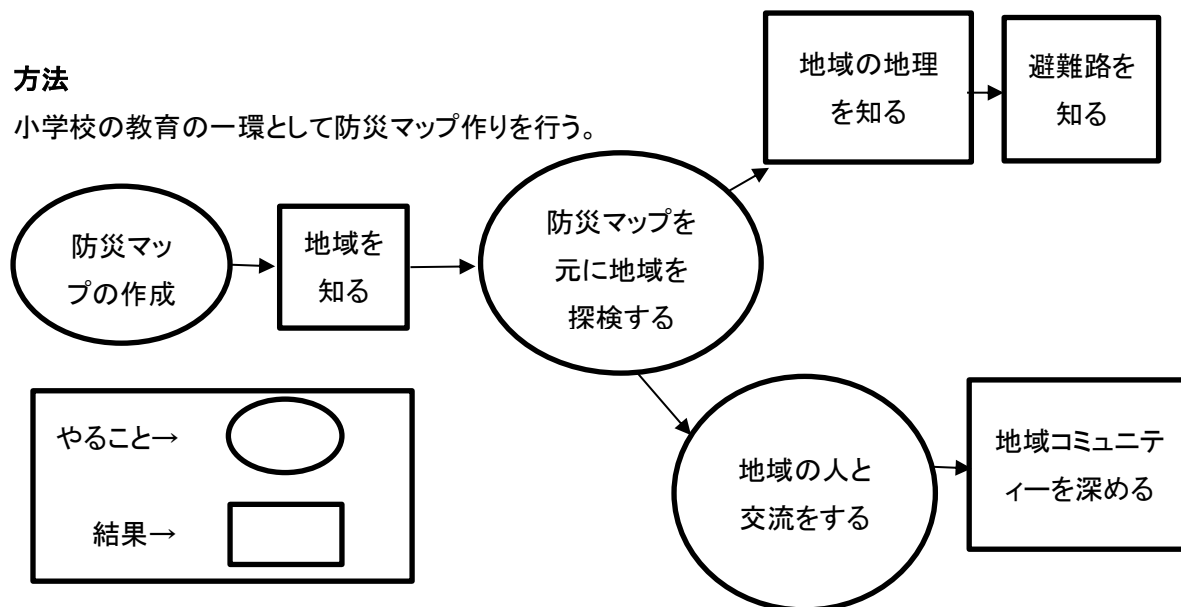
- ① 避難する、しないの伝達遅れにより被害から逃げきれない。
- ② 高齢者や身体障害者、小さい子どもなどが津波から逃げられず、救える命も救えない。

理想

震災時の周囲の人と協力し合い、一緒に逃げることができる。

方法

小学校の教育の一環として防災マップ作りを行う。



* これらはいくまで一つのサンプルであり、各自がさらに考える新たな案を出すことが重要である。

注意

- ・ 小学校1年生～6年生数人ずつで班を構成し、これらの活動を行い、学校内でのコミュニティを深める。
- ・ 一回だけでは足りないなので、地域の人とあいさつができるようになるまで行う。

防災マップ作りの活動は、教師と生徒、地域の人々が協力し合い、活動を掘り下げていき、震災について真剣に考えることを目的とする。

③ 防災教育

現状:イメージのつかみづらい防災教育

理想:震災当時のリアリティーが伝わる防災教育

改善策

- ① 震災時にどんな行動をとるべきか。あらかじめ何を準備しておくか。震災時に役立つか。てんでんこにするべきか否か。などを自分達で考えさせる教育。
子どもたちだけでは限界があるため大人が適宜補足する。
自分で解決策を編み出すことで受け身に教わっているときよりも頭に残りやすくなる。
- ② 被災地をジオパークに指定して修学旅行先にするなど観光地化し被災地の状況が分かるようになる。
- ③ 防災マップを子どもたちに書かせることで防災意識が高まる。
- ④ 子どもたちでも震災時の状況が分かりやすいビデオを製作する。

④ 行政に起因する問題

現状:被災者をとりまく様々な問題

理想:被災者の心が癒される復興支援

今、被災者の周辺では行政に起因する様々な問題が起こっています。

- i. 仮設住宅
被災者の多くは震災以前に住んでいた土地を離れ、新しい土地で全く知らなかった人々との生活を強いられています。新たな人間関係の構築は、震災によるストレスがある中では更なる精神的負担となります。
→被災者の心のケアが必要
- ii. 被災者の社会活動
行政は被災者への義援金給付を行っています。義援金は生活支援を目的としていますが、その義援金を使った娯楽(パチンコ等)への浪費が目立っています。その背景の一つに被災地での雇用不足があります。震災によって失業した人々の社会復帰が困難となっているのです。
→被災地の雇用回復の必要

これからの震災とどう向き合うか

<解決策>

i. 被災者の心のケア

- 地方自治体が散り散りとなった友人といつでも集まれる場所をつくる。親しい友人とリラックスして過ごすことで、心的ストレスの解消をはかる。
- 地方自治体が被災者への傾聴を行うボランティアを募集する。
- 著名人を招待した、被災者向けのイベントを開催する。
- 地方自治体で動物を飼い、仮設住宅で動物セラピーを実施する。

ii. 被災地の雇用回復

- 被災地に企業を誘致する。迅速な雇用回復を目指すために被災地に進出した企業には、法人税を下げるなどの特別待遇をとる。
- 農地開拓の援助を行う。農業組合の再結成を行う。
- 被災地の観光地化。震災の事実を広島の原爆ドームのように日本国民として忘れないものとし、当時の様子がわかる資料館、公園(ジオパーク)をつくる。文科省と協力することで防災学習の一環として。小・中学校での修学旅行先として推奨する。

感想

今回の参加をきっかけに、震災と改めて向き合うことができました。地震は非日常である一面、いつ起こるか分からない身近なものだと思います。東北の被災地で起こっていることを真剣に考え、行動する、そのことの重要性が分かりました。自分がすべきこと、自分にできることを見つめていきたいと思っています。

高3 西村 一光

被災した方々のために何ができるのか、どうしたら力になれるのかを自分の中で考えることはよくありました。今回、一番良かったのはそれらを自分で考え、みんなに発表し、深められたことです。そして今まで以上に、もっと震災について考えなければと思いました。

高3 若井 悠貴

地震が引き起こす問題、それへの対策などについて朝から晩までこんなにもみっちり議論し合い、互いに持ち寄った知識をシェアする機会を得ることができて、とてもうれしかったです。ここで、培ったことをここだけで消化せず外に情報を発信し様々なことを吸収していきたいと思っています。

高3 筒井 音羽

今回は、子ども国会に初参加させていただき、濃密な時間を過ごすことが出来ました。他校生との交流もすることができ、非常に自分にとって大切な時間となりました。震災についての貴重な意見交換であったこの会を、これからの自分に活かしていきたいと思っています

高3 齋田 悠平

僕はこの子ども国会を通して、高校生の皆さんの地震に対する思いが聞けました。僕は中学生で最初は慣れなかったですが討論を通して慣れて良かったです。また、次回も参加したいと思っています。

中1 野村 祐輔



子ども国会実行委員会